

特別養護老人ホームにおける虐待の現状と傍観者に関する研究

医療福祉学専攻・先進的ケアネットワーク開発研究

氏名： 嵯峨井 千佳

キーワード： 高齢者虐待、介護職員、虐待の傍観者、ユニット型施設

I. 研究の背景と目的

虐待は起こってはならない、予防しなければならないことは誰もが認めることである。わが国では、2006年4月「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律（以下「高齢者虐待防止法）」が施行された。養介護施設に対しては、養介護施設従事者等の研修の実施など、高齢者への虐待の防止のための措置を課しており（第二十条）、高齢者虐待の防止に全面的に取り組むことが求められているが、厚生労働省の「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果」での要介護施設従事者等による高齢者虐待は年々増加している。平成 2013 年度の同調査でも、養介護施設において高齢者虐待と認定された件数は 221 件と前年より 42.6%増加している。しかし、相談・通報件数はさらに多く 962 件と認定された件数の 4 倍以上である。また、これまでの調査や先行研究からみても、養介護施設・事業所で行われている高齢者虐待は、公表・報告されているよりもかなり多くの「潜在例」があると考えられており、それらの虐待は見逃されている現状があると思われる。

本研究では、特別養護老人ホームの日常的なケアの中で、高齢者虐待がどのような状況で発生しているのか、それを取り巻く周囲の職員の実態をインタビュー調査し、虐待がなぜ発生するのか、周囲の職員がなぜ止めることができないのかを検証することを目的とした。

II. 方法

1. インタビュー調査

- 1) 対象：I 県 A 法人の特別養護老人ホームに働く、夜勤経験のある介護職員（4 施設 11 名）
- 2) 調査期間：平成 27 年 5 月～6 月
- 3) 調査方法：半構造化面接による個別インタビュー
- 4) 分析方法：質的記述的研究法により、逐語録からまとまりのある意味に切片化したものをラベル化し、コード化、共通性、関連性を抽出し、カテゴリー化した。

2. 倫理的配慮

国際医療福祉大学倫理審査会の承認を得て実施した。（承認番号 14-I g-143）

III. 結果

研究協力者の概要は、男性 4 名、女性 7 名の 11 名で、年齢は 20 代～60 代で平均年齢は 36 歳、平均経験年数は 9.9 年であった。勤務地の施設形態は、従来型施設勤務者が 5 名、ユニット型施設勤務者が 6 名であった。

インタビューの逐語録から、5 カテゴリー【 】, 24 サブカテゴリー [], 53 コード< > が抽出された。抽出されたカテゴリーは、【虐待が発生しやすい状況】【虐待の傍観者】【虐待観】【個別例への虐待観】【施設内の人間関係】であった。

特別養護老人ホームでは、[夜勤のストレス] や [職員が足りない現場の現状]、<利用者からの暴言・暴力> など [利用者の日頃の言動にストレスを感じる]、[個人的な悩みやストレス] などの【虐待が発生しやすい状況】によって虐待が発生し、<職員の言動に見て見ぬふりをする> などの【虐待の傍観者】によって見逃されている。【虐待の傍観者】は、<言葉の虐待はしょうがない><拘束はしてはいけませんが仕方がない> など [ある程度の虐待はしょうがない] や、<虐待をすることは駄目だがそこに至る気持ちはわかる> などの【虐待観】と、<イラッとするタイプの利用者> や <手のかかる利用者> など、この利用者が虐待されるのはやむを得ないという【個別例への虐待観】を虐待者と共有していた。虐待を止められない理由としては、[虐待者との人間関係] や [職場でギクシャクしたくない] などの【施設内の人間関係】が影響していた。

また、施設形態による違いとして、従来型では [職員との関係にストレスがある] など職員同士の人間関係が、ユニット型では [ユニットの孤独な環境] や [ユニットの閉鎖的な空間] などの環境が、虐待の発生要因に大きく影響していた。

IV. 考察・結論

特別養護老人ホームでは、人員不足や業務の多忙などの施設の状況に、対利用者のストレス、対職員へのストレス、プライベートの状況が加わることで虐待が発生しやすい状況となり、虐待が発生、それらの虐待は虐待の傍観者によって見逃されている。虐待の傍観者は、虐待者と同様に虐待が発生しやすい状況で働く中で、虐待観を虐待者と共有することで虐待を傍観している。また、虐待を止められない理由として、施設内の人間関係が大きく影響していた。

施設形態による虐待の発生要因の特徴では、人員不足は従来型施設・ユニット型施設双方に見られているが、複数の職員が共同で働く従来型施設では、対職員によるストレスが大きく影響するため、虐待はしてはならないことだと認識がありながら、虐待を目の当たりにしてもその後の人間関係がギクシャクすることを避けるために傍観者になっていた。ユニット型施設では、ユニットケアの特長である利用者と職員の近くで濃密な関係性を作るための環境が、介護職員の孤独感と閉塞感を強め虐待発生の要因となっており、ユニットケア特有の閉鎖的で孤立した環境を理由に「言葉の虐待はある程度しょうがない」や「身体拘束は仕方がない」など、虐待を正当化し許容していた。